

## 4 侵入害虫ミカンキイロアザミウマのバラ温室における発生消長と薬剤感受性

### ねらいと成果

ミカンキイロアザミウマは、1990年に関東地方で初めて発生が確認され、兵庫県でも1995年に花きで発生が確認された。花きだけでなく、トマト、イチゴなど野菜でも発生している。発生消長が明らかでなく、多くの薬剤の効果が低いことから、今日では最も防除が困難な害虫の一つになっている。そこで、バラ温室における発生消長を明らかにし、各種薬剤に対する感受性を検定した。その結果、年間の発生消長が明らかになり、いくつかの有効な薬剤を選抜できた。

### 内容

バラ温室で1997年5月から1998年5月まで青色粘着トラップによる誘引虫数、バラ10花当たり寄生虫数及び被害花率を2週間ごとに調査した。粘着トラップ設置後の1997年5月に発生が多くなり、6月も比較的高密度であったが、7月は低密度で推移した(図1)。9月上旬になると急に密度は高くなり、年間を通して最も発生が多かった。その後は気温の低下とともに密度が減少したが、冬期でも加温するために継続して発生した。翌春4、5月になるとやや増加した。バラ10花当たり寄生虫数でも青色粘着トラップと同様の傾向を認め、5月に発生が多くなり、夏季に減少したが、9月上旬に再び増加した(図2)。花の寄生虫数と被害花率との関係は深く、寄生虫数が多くなると、被害花率が高くなった。

次に、薬剤感受性を検討した。内面にも薬液処理した容器に、30秒間薬液浸漬して風乾させた葉片を与えた場合(容器・葉片浸漬法)には、成虫に対し

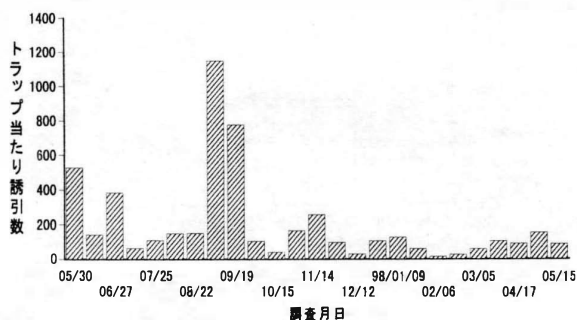


図1 青色粘着トラップによる誘引虫数の推移

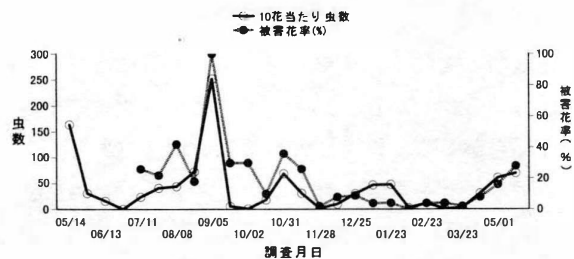


図2 バラ花の寄生虫数と被害花率の推移

てネライストキシン系のエビセクト水和剤、パダンSG水溶剤、有機リン剤のエルサン乳剤、合成ピレスロイド剤のアグロスリン乳剤及びエマメクチン系のスピノエース顆粒水和剤の殺虫効果が高かった(表)。幼虫に回転式散布塔で直接散布した場合(リーフディスク法)には、エビセクト水和剤、エルサン乳剤、マクロライド系のアフーム乳剤、ピロール系のコテツフロアブルの効果が高かった。その他の多くの薬剤の効果は低かった。新剤のスピノエースは、容器・葉片浸漬法で検定した場合、希釈倍数32,000倍の低濃度でも死虫率は100%であった。

### 普及上の注意事項

作物、場所によって発生が異なる場合があるので、青色粘着トラップを設置して発生状況を把握し、防除対策に役立てる。本虫に登録がない場合には、その作物に登録のある効果の高い薬剤で他害虫との併殺をはかる。

河野 哲(中央農技・環境部)

表 主な薬剤の死虫率(%)

薬剤	葉片・容器浸漬法 (成虫)	リーフディスク法 (幼虫)
アプロート水和剤	0.7	39.9
カスケード水和剤	8.3	66.2
モスピラン乳剤	65.2	28.2
アトマイヤー水和剤	34.5	39.9
ベストガード水和剤	11.7	53.2
パダンSG水溶剤	96.4	77.8
エビセクト水和剤	100.0	100.0
コテツフロアブル	48.6	100.0
アフーム乳剤	51.9	100.0
アグロスリン乳剤	100.0	55.6
アーテント水和剤	87.5	76.1
エルサン乳剤	100.0	100.0
ホルスタール乳剤	58.1	100.0
スピノエース顆粒水和剤	100.0	-